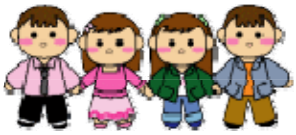
＜４３回企画＞

USAO



　最近消しゴムアートと言うのが、流行っているとのこと。友人の M 氏は今から 30 年前にこのアートに目覚めていた。製図用のプラスティック消しゴムにカッターナイフを使って上司の印鑑のイミテーションを作っていた。これを如何、使っていたかは知らない。
うさおも教えられてオリジナルの蔵書印を作った。うさおはカッターナイフの代わりに時計ドライバーという 1mm くらいの刃のものを使った。面白くてぺたぺた色々な本に押しまくった。挿絵に押すペンネーム印も作った。描いた絵にペタン、ペタン、見境も無く押しまくった。とても迷惑がられた。
　この M 氏とはタツオトさんのことだ。
自宅から見える遠くの景色が何であるかを探って、大きな白地図に書き込む仁が居ると以前に書いた。それが K 氏である。札幌生まれだからではないだろうが、北からロシアや K 某国が攻めてくる。防共の意思を持たなければという思想に取り付かれている。このように極右の思想の持ち主だが、虫、爬虫類にすこぶる弱い。スローライフを始めるために、千葉に移住した。気候が暖かいのは望みどおりだったようだが、予想外だったのが猫ほどの大きさの鼠やこれも大きな百足などであった。先日、Cacco と訪れた際、昨日はこれが取れてと小さなビニール袋に入れたヤスデを見せてくれた。いいのに、見せてくれなくて。メールが来た。大きな蜘蛛が出て外に逃げ出したと写真を送ってきた。いいのに、送ってくれなくて。

Y　YAZAWA

『アフリカの奥地で原住民に無作為の誰かの写真を見せて知り合いをたどっていくと本当に六人目で当人にたどり着けるのか』（詳しくは『好奇心漫遊記参照』）
Cacco さんの公開質問に答える形で友達を紹介します。
好奇心漫遊記では公開質問を数学的に考えましたが、今度は社会科的に考えます。実際に世界の誰かにつながる方法を考えてみようと思うのです。
一番つながりにくいと思われるのは誰でしょう。例えばアメリカの大統領なんかどうかな。
実は僕は昔総理大臣をやっていた竹下登を知ってます。ご存知の通り彼は島根県の出身で僕の友人の親父が後援会長をやっていたのです。夏休みに帰省したとき等その友人から「今竹下が来ているからお前も来て一緒に飲まないか？」というように誘われたりしました。もちろんまだ総理大臣になる前のこと

です。友人宅は大きな家で部屋がいくつもあったので、飲みすぎるとその晩は泊まって翌日帰るなんてことが良くありました。竹下さんは人のよいおじさんって感じで、マスコミではいろいろ毀誉褒貶がありますが僕は好きでした。竹下さんと最後に会ったのは彼が現職の大蔵大臣の時、その友人の結婚式でした。
竹下さんならアメリカの大統領も知っているだろうから、この場合は
僕→友人→その親父→竹下登→アメリカ大統領
と４回でつながってしまいました。
ただ竹下さんは亡くなってしまったので、今まだ生きている人ということになると先の参議院選挙で落選しちゃったけど景山俊太郎ということになりますね。別の友人が彼の選挙参謀みたいなことをやってました。国会議員なら国の要職の人を知っているだろうから、その人はアメリカの要職の人を知っていて、その人はブッシュ大統領とも知り合いでしょう。だからこの場合は
僕→友人→景山俊太郎→日本国の要職→アメリカの要職→ブッシュ大統領
と５回でつながりました。
有名人とは比較的簡単につながるかも知れませんね。
逆にニューギニアの奥地に住んでいる原住民なんてのはどうかな。こりゃあなかなかつながらないと思われるけど、ちょっとがんばってみましょうか。
その原住民さん自身が知り合いが少ないので大変です。強いてあげると文化人類学の学者かなんかかな。「銃・病原菌・鉄」という本の作者ならニューギニアの原住民を知っているはず。（ちなみにこの本は大変面白い本です。ニューギニアの原住民の方が西洋人より生物的に見た資質では優れている点が多いのに、どうして文明を発展させなかったのか、と言った考察が述べられています。）ならばその出版社や翻訳者までたどり着けばいいはず。僕がマッキントッシュの本を出したときの講談社の担当者はそれを知っているかも知れない。
ということでこの場合は
僕→講談社の人→某出版社の人→「銃・病原菌・鉄」の作者→ニューギニアの原住民
と４回でたどり着きました。『某出版社の人→「銃・病原菌・鉄」の作者』の間に二三人必要かも知れないけど、それにしてもトータル６回か７回でつながりそう。
６回あれば世界の誰でも知り合いでつながる、というのは結構当たってるかも知れませんね。
何の変哲もない特徴もない人とつながるのが一番難しいように思う。ロシアのイルクーツクに住んでバイカル湖の魚をとって暮らしている人、なんてのは大変難しいだろうなあ。この人とつながる方法は・・・？皆さん考えてみてもらえませんか。

Ｃａｃｃｏの自慢の友達は年間１５０本も映画を観ちゃうかずくんです!(^^)!そのエネルギーには感嘆するほかないです。映画を観るとか本を読むとかって自分以外の他人の人生に入り込む作業、あぁいろんな人たちが生きているんだなぁと思います（わたしはちょっとしか見ませんが）。年間１５０もの人生ストーリーを体感するかずくんは５００才分くらい生きてるんではないでしょうか？

変な友達の筆頭は健さんです（どんなところが変かというのをわたしがばらすのはやっぱりまずいだろ)。健さんとは長～い付き合いなので実は友達というよりしがらみのない身内感覚です。不思議なことに本物の身内のＴＩＣＡさんは身内というより友達に近い気分。特にＤＧでの付き合いは遠慮のない友達感覚だと思われ・・。←ＴＩＣＡさんのまねってか北国の純のまね。

ＤＧ会員の皆々さまとは８年という長いお付き合いですが、不思議といつも新鮮、新しい友達のイメージです。その人の書いたものを読むことはその人そのものを知る手っ取り早い方法。だから、よ～く知ってるはずなのになぜかしらんいつも新鮮なのは実際会ったことがないからなのかなぁ（由佳ちゃんとは会ってます！その節はありがとう！あの時を思い出しては胸キュンしてます)。ＤＧは仲間というほうが近いかしらん。

あと三か月経つと丸三年にもなるのにちっともできるようにならない韓国語。そのご学友もおります。ご学友たちはなかなかユニークな集まりです。テレビの特集などでヨンさま追っかけおばさまなんかをよく見てきたけれど、ほんとそのまんまじゃんてくらいキョーレツキャラの方たちも多い。来日すれば成田に出迎えに行き、兵役に行けば韓国まで見送りに行き、その気力でぐぐんと語学も上達する。好きな人の言葉を聞き逃すまいと耳もぐぐんと大きくなる。はぁ。そんな中でわたしはどうかというと、どんなに素敵な微笑みでも微笑みだけでは愛せない、共通の母国語（もち日本語！）を持ってわかり合いたい、あぁ桜井くんが日本人でよかった！こんな心根だからできるようにならないのは当たり前。韓国語仲間からは完全に落ちこぼれてるのです。はぁ。

友達、仲間、仲良し、親友、幼馴染、学友、まぁいろんな表現があるし、何をもって友達と定義するか、「知り合い」とのボーダーラインはどこか、この辺は全く個人的判断。「友達いなくてさ」なんてつぶやく人も案外多い。「たくさんいるじゃーーん」と他人が言ってもしょうがない。友達ってのも「気がつけばそこにあるもの」「気がつかなければどこにもないもの」ってことなのかもしれない。
広辞苑を開くと「友達」＝親しく交わっている人　「親友」＝親しい友
「心友」ってのもある。心を許し深く理解し合った友
「友達いなくてさ」というつぶやきは「心友いなくてさ」ってつぶやきなのかもしれない。そうだったら簡単に「たくさんいるじゃん」てわけにはいかない。「気がついてもないもの」だったり「そこにあることに気がついて培っていかなければならないもの」だったりするんじゃないかなぁ。

まぁ、てっとり早く「心友」を持つ方法は（もし、ほしいと思うなら)「心の中の友」を作っちゃえばいい。わたくし幼少の頃から「ポケットに小人がいたらなぁ」と思っておりましたの。今も昔も小人はポケットの中にいないけれど、それにとても近い存在として「ミスチルの桜井くん」というお方がおられます。最近ではこの小人くんはぐんと実体を持ちまして、わたしの背中を押してくれたりするのでございますよ。と、話の行き着くところはいつもここじゃん。こんな自己チューに友達なんてなかなかできないって。はは。

HIDEHIKO

＜友人＞と＜友達＞と＜親友＞は微妙に違いますが、小生の定義では＜友人＞と＜親友＞の間にあるのが＜友達＞と考えます。それで、友人は結構いるのですが、友達となるとめっきり少なくなって、親友となると皆無の寂しさなんです。親友は苦境のときでも絶対に裏切らないが、友達はときには裏切ることもある。しかし、底流として引き合うところがあって、時が経つと許すことになるような「友」といえるかな？　＜何とか仲間＞というのもありますが、＜仲間＞は目的的に集まった友人または友達の集団と言えるでしょうか。Dokugaku の仲間も一例ですね。先日、中島みゆきのコンサートに行ってきましたが、そのとき集まった見ず知らずの人たちは劇場という空間で同じ時間を共有する＜ファン＞という仲間である訳で、仲間はもっと広い意味を持つようですね。この場合は一期一会の精神で、例えば新宿の雑踏で肩が触れ合うと「このやろう！」って気持ちになるとしても、大混雑のコンサート会場では平気で「ごめんなさい」って言えるのも、＜仲間＞空間である故だと思います。ということで、友達というのはときには利害が反しても、反目してもよいが、何となく離れられないような存在と考えておきましょう。

前置きが長くなりましたが、異色の友達を 4 人（？）紹介しましょう。

（1） T ちゃん

友達がいっぱいいたのは子供のころで、大人の自転車に初めて三角乗りできた頃ですから、小学 5 年生だったかと思います。その頃、埼玉県の疎開先にいて、造幣局の官舎として建てたという新築の四軒長屋に住んでいました。戦後の混乱期ですので、平屋で庭付きのそれは結構上等だったようです。自宅は角地でかなり広い庭があって、母が野菜や花を植えていたのを思い出します。両親の話では裏の棟に、後に映画スターになった三橋達也氏のご両親が住んでいたそうです。ある歳末の夜に復員者が我が家を間違えて訪れたそうで、それが後の三橋達也氏だったそうです。そのご両親は「うちの息子がいずれ映画に出る」と期待していたそうで、デビューは当時大スターの田中絹代との競演で飾ったそうです。息子の出世で、早々に官舎を出て行かれたということでした。

それで、本題に入りますが、近所の別棟の長屋の左から 3 軒目に T ちゃんは住んでいました。父親はあまり家におらず定職のはっきりしない人ということでしたが、小柄痩身の、たまに会ったときはニコニコしている人という印象でした。母親は継母で水商売上がりの人ということでしたが、美人でも無く普通の人でした。T ちゃんは母親を「あいつ」とばかにした言い方で話すので、自分も敬遠していました。T ちゃん自身は小生より多分一つ下で、＜兄貴＞と呼んで付きまとって来ました。家庭環境がよろしくないとの評判で、近所ではあまり付き合いたがらない様子でしたが、小生が邪険に振舞っても、いつもペッタリ付いて来るので、我が家の両親も T ちゃんを隔てなく可愛がっていました。T ちゃんは年下ではありますが、いろいろ社会的な経験をさせてくれました。おとなの自転車を改造した＜子供用＞自転車に乗って今でいうツーリングをしたのも T ちゃんのお蔭で、一緒だからできたのでした。自宅のある村は深谷駅から 6 ｋｍほど奥の利根川に近いところにあり、そこから深谷、籠原、熊谷と高崎線の沿線を走って、一回りするのは子供にとっての大冒険でした。田んぼ道をひた走るのですが、途中けんかして＜ついてくるな＞といったり、果ては道が判らなくなって二人でべそをかきながらようやく帰宅したのは今では良い思い出です。多分夕方 7 時頃になっていたのでしょう。両方の親が待ち構えていた

ように思います。無事に戻ってきたので大して怒られもせずに終わったと思います。

また、別の日にはＴちゃんが家からこっそり持ち出した空気銃を隠れて撃ちに行きました。鉛の玉を詰めて撃つのですが、小学生には結構重くて、銃身の震えが止まらないため、なかなか的に当たらないのです。雑木林からぶら下がっているカラス瓜を狙っては二人で当てっこしました。二、三回そうした遊びをしている内に、Ｔちゃんのお父さんに見つかって銃を隠されてしまい、その遊びはお仕舞いになりました。そのほかにも、Ｔちゃんが持ち出してくる花札とかサイコロとかを使った遊びをするのが、冒険心をくすぐり、楽しいものでした。当時、江戸川乱歩の少年探偵団が使う BD バッジが少年の心を揺さぶるものでしたが、空気銃の玉を溶かして、BD バッジもどきのものを作り探偵気取りになったりしました。果てはクラスのちょっと気になる女の子の家を突き止めようと、二人して麦畑に隠れて尾行したりもしましたが、途中で気付かれてしまい、小林少年にはなれずに失敗に終わりました。

そのような一緒に遊んだ期間はそれほど長くなく、多分１年よりも短かったと思います。終わりは突然やってきました。T ちゃんの父親が盗みの容疑に警察に捕まったという話で、ある日、継母と一緒に、多分下に女の子が一人いたと思いますが、家を退去することになってしまいました。学校も代わるということで寂しく出て行ったそうです。小生とは多分その前日かと思いますが、T ちゃんが家に会いに来たことを覚えています。＜またなっ！＞というような簡単な挨拶で別れたのが T ちゃんとは最後です。いろいろありましたが、

T ちゃんは数少ない友達でした。今思うに、多分親友だったのに違いありません。

（２） 木田公一氏

木田君は数少ない現役の＜お友達＞の一人である。本誌にも時たま登場しているので覚えておられるだろうと思う。自称「随筆家」を名乗っているが、とんと商業誌ではお目にかかったことがない。有名人のゴーストライターで稼いでいるとの噂もあるが、浅見光彦的な生活をしている熟年フリーターであるらしい。小生もどのようにして糊口を凌いでいるのか分からないが、結構裕福な生活をしている。遊覧船での旅をしたり、海外へ移住したりで、どこかに有力なスポンサーが付いているのだろうか。最近はメールで消息を知るのみであるが、突然会いたいといってくるなど、ずいぶん身勝手である。小生とは大学の同期であるが、３歳年上である。若い頃の３歳違いは大きく、「木田さん」と呼んでいたのを思い出す。当時から博学で哲学やら倫理学やら心理学などに通暁していて、これでどうして東大に落ちたのか不思議に思ったことがある。小生はエレクトロニクス関係に、木田君は電力関係に仕事を得て、別れ別れになった。卒業後 10 年位は時たまクラス会やサークルの OB 会（同じ独研だったのだ）で会うことがあったけれども、小生も出席率が悪くなり、木田君も出て来ないことが多くなり、やがて消息が途絶えた。それからずうっと会うことがなかったのだが、5 年前に久しぶりの大学のクラス会に出てみると、そこに「木田さん」がいた。彼はなんとおよそ 30 年ぶりに出席したのであった。このときの状況はかつて本誌において中吊り小説の解説のまえがきに書いたので省略する。それ以来の付き合いであるが、いまは家族もおらず一人である。あまり、核心のことは聞かないのであるが、妻たる女性はいたらしい。言葉の端端に垣間見えるので、もしかしたら「相棒」の杉下右京のような関係かもしれない。先年豪州に邸宅を手に入れて住むようになったという連絡が入った。一昨年の春に IEC/TC56 という「信頼性」の国際標準化会議がシドニーで催された。小生も国内委員として参加したが、その間の 1 日、木田君に連絡を取って彼の家を訪問した。そこはシドニー市内から車で 1 時間の郊外で、ブルーマウンテンが望

見できる丘にあった。彼の語学力と技術経験ならオーストラリアの永住権や市民権（オーストラリアは重国籍国なので日本国籍と合わせて持つことが可能）を取ることは容易のようであるが、年齢、家族、雇用の各問題があって、クリアするには現在の自由を犠牲にしなければならず、保留中とのことであった。いまは短期渡航者として滞在しているとのことであった。部屋は広くて明るくて羨ましい限りである。なんと three bedrooms なのだ。一人しか住んでいないのに。通いの家政婦さんがいて掃除や洗濯などは任せているという。小生はダーリング・ハーバー近くのホテルに泊まっていたので、夕食はハーバーサイドのイタリア料理で歓談した。酒は小生同様あまり強い方ではなく、オーソトラリア・ワインですぐに赤くなりながら、原住民のアボリジニの研究をライフワークにしていると熱っぽく語った。アボリジニの日本人起源説など思いも掛けない話をして小生を煙に巻いたものである。そこには大学時代の＜木田さん＞がいた。

（３）津田秀彦氏

「津田日出彦」は小生のペンネームであるが、津田秀彦氏は小生とは別人であります。なぜ、小生が日出彦を名乗るかという経緯はこの津田秀彦氏に関係します。津田君はやはり大学の同級で小生と同様に現役入学したため、年齢が近いことで仲良くなりました。大学は同じでしたが、学科は違い、彼は応用化学科でなかなか情熱的なところがありました。ビールを飲むと高らかにドイツ語の歌を歌い、名曲喫茶のリンデンでシューベルトの楽曲を聴いて過ごすような男でした。

60 年安保のときで、東大の樺美智子さんが国会デモで亡くなり、闘争が一挙に過熱化し全国的に広がりました。自分の大学でもノンポリの学生も巻き込んで総決起集会を開き、国会デモへの参加を決議し、授業は軒並み休講になりました。津田君も悲憤慷慨してデモへの参加を決心し、小生も誘われて国会周辺に繰り出しました。しかし、既に厳重な警備で、突入するようなことは起こらず、周辺の広場でジグザグ行進をして解散という気の抜けた状態に終わりました。大学はすぐに元通り何もなかったように授業を続け、一部の活動家だけが行動を続けるという状態でした。津田君は政治活動には入らず、ゲーテやトーマスマンを読みふけっていました。小生はシュトルムやヘッセの方が好きで、安保以来やや遠ざかった関係となりました。

翌年の 3 年になった夏休み、津田君は級友の某君の誘いで福島県会津若松市の旧家に遊びに行ったといいます。当人の話では、そこで、ほっそりした、しかし健康的な美人の高校生と出合ったそうです。その女子高生は某君の許婚で、その家に起居していたのでした。そこに、恋愛感情のようなものが二人の間に芽生えたといいます。しかし、それが進展する間もなく、その家に事件が起きてしまいました。病身の美しい兄嫁が殺されたのです。警察の捜査で容疑者も挙がらず、事件は迷宮入りになるかと思われました。津田君は友人の某君に乞われて、素人探偵まがいのことをしたそうです。しかし、事件はさらに悲劇を生み、死人が続きました。自然に足止めを食った形の夏休みの最後に、津田君は思いがけない犯人を突き止めることになります。しかし、それがはかない恋の終わりでもあったのです。なんだか 2 時間サスペンスドラマのような展開ですが、本当にあった話として、津田君自身から小生が聞いた話です。もっと生々しく詳しい話を知っているのですが、現在でもその旧家は残っていますので、具体的に事件の顛末を書くわけに行かないことをお許しください。

翌年、卒業を控えた時期に、津田君は突然失踪してしまいました。関係者で思い当たるところを探し回りましたが、結局分からずじまいで、今に至るも消息が不明です。10 年ほど前に外資系の商社に勤めていた学友から、アフリカのザンビアに津田君によく似た現地人がいたという話を聞きましたが、彼だ

ったかどうかは謎のままです。

失踪して彼を探し回っていたときに、例の美人高校生にも会いました。確かに可愛い女子学生で、そのときもほんのり津田君が好きだったようなことを聞きました。あの悲劇が津田君にどのような影響を与えたのか、本人にしか知る由もありませんが、失踪の遠因になっていたような気がしてなりません。あれからもう 40 年、お互いに年を重ねました。

そのような訳で、小生が津田秀彦ならぬ日出彦を名乗っているのは、不運な青年へのレクイエムといってはまだ早いでしょうが、青春の思い出の証としてなのです。もし、戻ったら渡してくれとあの女子高生に頼まれた手紙がまだ封も切らずにここにあります。思えばともに遠ざかる昭和の生まれで、その証として昭和の「昭」は＜日を召す＞と読めるため、「日出」彦としたのです。

（4）ライちゃん

ライちゃんは Usao-Cacoo 夫妻の愛犬で、Dokugaku ではライ隊員として小生よりも有名です。高齢のため、目が不自由になって、物静かになりました。耳も悪くなったとはご夫妻の弁です。しかし、たまにしか来ない小生をよく覚えていてくれて、最近では足元にぺたんと座り、スリスリしてくるのがいとおかしです。小生はつい先日名前の由来を聞くまでは、「雷」ちゃんかと思っていましたよ。いつまでも、長生きしてくださいね。

KEN

随分昔の話になるが、ある時ＴＶで「友達は何人いますか」という街頭アンケートをやっていた。ある年配の男性会社員が「友達はいません」と言い切った。ごく普通の人でそれなりに人付合いもあるだろうにと思ったのでかなり意外な感じがした。この話を cacco 氏にしたところ cacco 氏もそれを見たらしく「ある意味潔いいよね。私も友達少ないんだ」という話になり「友達たっていろいろあるよね」、そもそも「cacco 氏と自分(健)って友達？」という話になり、即座に「健ちゃんは友達じゃないよ！」ときっぱり否定。一瞬気まずい雰囲気が流れた。結局、「まあ身内みたいなものだから」と弁解されてその場は終わった。実は自分も友達という感覚はなかったのでお互い様なのだが。只、あからさまに言われると心外な気持ちにはなった。他人に説明するとなると姉の友達の弟という関係になる。姉は予想に反し早く結婚して家を出てしまったのでその後は姉より付合いの度合いは深い。考えて見るとよくある関係とはいえ姉抜きで長いつきあいというのは不思議ではある。自分も趣味や会社の催事を通しての付合いは多いが友達と呼べる人は少ない。相手が友と思ってくれている場合もあるので書きにくいのだが「同好の士」に近い関係が多いようだ。そこで自分にとっての「友人の条件」を考えてみた。同じ価値観を持つ、理解しあえる、尊敬できる、刺激をくれるなどいろいろあるが結局、双方お互いの家を遠慮なく訪問できる間柄という思いに達した。双方というところが肝心なところ。家に上げるということは素の部分を見せても気にならない。気心が知れ合っているということだ。一方的な訪問というのは相手がどう思っているのかわからないところがあり、自分側からみて利害関係になってないかなどの疑問が残るからだ。その点でいえばcacco氏は友達の条件に当てはまるがcacco氏のいう身内というよりは幼なじみに近い関係という気がする。DOKU-GAKU を読むと友達は少ないと書かれている会員さんが目立つ。仕事柄、交

流の範囲が自分よりはるかに多いと思うのでちょっと意外な気がする。
自分の場合は自分を曝け出すのは嫌いなので親友という関係にならないケースが多いのかも知れない。
DOKU-GAKU に誘われた時も文を書くのが苦手だったのもあるが自分を出すのが嫌だったので最初は断っていた。DOKU-GAKU を始めて丸８年。よく続けられたものだ。
ついでなので DOKU-GAKU 会員との関係について書くことにする。以前うさおさんが相関図を掲載したことがあるので概略はご存知かもしれません。cacco 氏は姉が中１の時の同級生。自分は当時小五でした。この頃は直接話をしたことは無い。cacco 氏と姉は小説だか童話だかわかりませんが挿絵つきのストーリーなどを一緒に創っていたのを見かける程度だった。cacco 氏が漫画家志望だったこともあって姉を通して漫画週刊誌の交換購読を始めるようになり、自分が推理小説にのめりこむようになってからはそれらの本も貸し出すようになった。お返しに中学生の時、誕生日にＶＡＮのシールを貰った記憶があるが会社に入る頃までは話をしたことは無かったように思う。付合いはじめたのは会社勤めを始めた時期でその頃、cacco 氏は夜になるとぶらりと家に来たが姉は帰りが遅く不在がちだった。それを機に喫茶店に誘われるようになり話し相手をするようになった。場所は近所の喫茶店、話すことはＴＶや映画、漫画、小説の事がほとんどだったのでプライベートな事はお互い聞かなかったように思う。うさおさんの事も紹介されるまで話は全く出なかった。ある日いつものように喫茶店で待ち合わせをしていたところへ後からやってきたうさおさんを婚約者だと紹介されたのが初対面だ。うさおさんはスーツ姿で誰かの結婚式の帰りだとか言っていた。突然紹介されても対応が出来ずとまどっていたがその後 cacco 氏の姉夫婦が合流し、近所の姉夫婦の家で麻雀をしたのがきっかけで cacco 氏の結婚後もちょいちょい麻雀相手としてあがりこむことになり現在に至っている。cacco 氏に「綾の鼓」という同人誌を買わされた（貰った？）記憶があるがそれがうさおさんの主宰する同人誌と知ったのは結婚後の事だった。ＴＩＣＡちゃんは cacco 氏の妹。詳細は書かないがよく街で見かけたが近寄りがたい雰囲気があった。ある日 cacco 氏の実家を訪ねた時、ＴＩＣＡちゃんしかおらず「誰もいないけどあがんなよ～」と気さくに言われた時はそれまで口をきいたことが無かったので大分感じが違うなと思った反面「え～、そんなに不用心に上げていいのかと」と思ったのも事実。自分は人見知りする性質なので初対面の人は苦手なのだが不思議に cacco 氏の実家は気を遣わない。他の友達の所もどういうわけか勝手に家に入って寝転がっていても咎められないような所ばかりだ。もう一つ共通するのは料理や菓子をやたらに出されることだ。出されたものを残すのは嫌いなので一粒も残さず食べることにしている。それがいけないのか次々と出されるのは困ったものだ。あまり食べないし手をつけないと「これは嫌い？」と聞かれると手を付けない訳にいかない。それだけ気を遣って貰っているので文句も言えないのだが･･･。Cacco 氏や実家のお母さんもやたら出すのに自分は食べない性質なのでいい加減にしてくれと怒っちゃうことはありますが。身内みたいなものと言ってくれているのでご勘弁。ちなみに cacco 氏のお姉さんは奇しくも一番上の姉が中学生の時同級生だったそうです。お父さんは囲碁の段を持っていると聞き碁を覚えハマッていた時はよく教えて貰いに行きました。

新春最初の企画でした。今年もみなさんの参加をお待ちしてます。
そう書いてるお前のがないだろって？
このあとのページで、た…っぷりとお友達になりたい人を紹介させてもらいます(￣―￣)ニヤリッ